

Y3-23

看護スタッフの意見を取り入れた転倒 転落事故防止対策離床センサーの開発

盛岡赤十字病院 施設管理課¹⁾、盛岡赤十字病院
看護部²⁾

○砂子澤 誠一¹⁾、藤村 幸雄¹⁾、平野 由美²⁾、
砂倉 あゆみ²⁾、佐々木 三希²⁾、木村 浩子²⁾、
伊藤 嘉子²⁾

【はじめに】平成13年頃より、転倒転落防止対策の一環として「既設のナースコール設備を用い患者の行動を検知したい」との要望を受け、反射型赤外線センサーを用いた離床センサーを開発した。その後も、センサーの有用性が認められ使用する病棟が増えたことにより、スタッフからの改善要求や異なる行動パターンを検出する他方式のナースコール開発要請に対応してきたのでその経緯を報告する。

【開発したセンサー】作成したナースコールは反射型赤外線センサーを採用した機器は大きく分けると3世代に分けられ、検知制御方式や患者の動きを適切にとらえるようセンサー取り付け金具に改良を加えることにより完成度を高めた。要望を受け作成したナースコールとして、ベッド柵を握ると検知するナースコールや無方向性リミットスイッチにカールコードを取り付け患者の着衣にクリップで固定し動きを検出するクリップ式ナースコールなどを開発した。市販品では異類のナースコールは併用不可能であるが、独自のアダプタを接続することにより複数ナースコールを使用可能となり検出精度が向上した。

【まとめ】実際の使用状況を確認することにより、新たな改善点が見つかることやスタッフの意見を取り入れることにより開発者側の意図と使用者側のニーズが一致し、結果として完成度を高めることができた。反面、複数の機種が混在することにより看護師により選択が分かれることから、適切な使用方法の周知をさらに推進したい。

Y3-24

離床センサー付きベッド導入に伴う転倒 転落安全対策の評価

旭川赤十字病院 看護部¹⁾、医療安全推進室²⁾、
循環器内科³⁾、副院長⁴⁾

○前田 章子^{1,2)}、栗原 篤子²⁾、児玉 真利子¹⁾、
西宮 孝敏^{2,3)}、牧野 憲一^{2,4)}

【目的】当院は、2008年11月に新棟移転と同時に、P社の離床センサー付き電動ベッドを全床に導入した。離床センサーは、患者がベッドから離れるとナースコールと連動し、知らせるタイミングは3段階に時間設定ができる。移転前までは、体動センサー「うーご君〇R」、床に敷く「まった君〇R」、体幹をベッドに固定する「体幹安全ベルト〇R」を使用してきた。移転後5カ月が経過し離床センサーの操作にも慣れてきたため、転倒転落安全用具を評価し効果的に活用できるよう今後の課題を明確にすることを目的に検討した。

【方法】離床センサーの操作にも慣れた2009年3月以降の転倒転落安全用具使用状況を調査、離床センサー使用に関する意見・感想の聞き取り調査、過去3年間の転倒転落件数を比較した。

【結果】転倒転落安全用具の使用状況は、体動センサーが全体で月130～140台使用と最も多く、次いで離床センサーが月60～70台と増加傾向であった。使い方は、離床センサーは徘徊・離院が予測される患者、体動センサーはベッドから転落・歩行時ふらつき転倒が予想される患者に使用していた。離床センサーの主な感想は、患者に束縛感がなく対応が早くなった、設定操作が複雑すぎる等であった。転倒転落件数は月平均で2007年26件から2009年18件に減少した。

【まとめ】離床センサーは、束縛感がないことから使用しやすく転倒転落安全対策に有効であると示唆された。今後、効果的に活用するためには、転倒転落危険度評価を踏まえて安全用具の使用基準を作成し評価を継続していくことが大切である。